

〔実践ノート〕

高校でのアクティブ・ラーニング型授業

小野 繁樹（埼玉県立越谷東高等学校）

はじめに

アクティブ・ラーニング型授業とは、主唱者の一人である溝上慎一(2016)によれば、知識を習得する時間(講義パート)と、「書く・話す・発表する」等の活動の時間(アクティブ・ラーニングパート)とを組み合わせ、知識の習得と同時に、その活用及び理解の表現をも行う授業形態のことであり、そしてこうした授業を作り出すことが喫緊の課題であるという。

勤務校(全日制普通科高校)で1年生を対象に公民科「現代社会」を担当しているが、そこで行うアクティブ・ラーニング型授業について、その狙い、手法、効果等を報告したい。

1 課題(テーマ)の設定

宮崎猛(2017)によれば、アクティブ・ラーニングとは、問題解決学習を基軸とし、その構成要素として発見学習や体験・調査学習、ディスカッション等が位置づけられるという。

問題解決学習とは、幾らか難度の高い課題(テーマ)を設定し、その解決策を協働で探らせるもので、以前から理数系の教科目や医学の分野等で行われてきた。

これを基軸にするという時、肝腎なのは生徒に示される課題の質である。それは十分練られ、かつ、生徒にとっては身近、切実、リアルなものであることが望ましい。

高校に入学してまもない生徒たちに、卒業までに身につけてほしい力として、コミュニケーション力とプレゼンテーション(発表)力の二つを挙げ、これの意味と意義を力説した後、基礎的トレーニングとして「高校生活に部活動は必要か?」というテーマを掲げる。

中学・高校の部活動については、長時間練習や休日の返上、家計に影響を及ぼすほどの費用負担(ジャージ代など)や教員側の過重労働等、様々な問題点が指摘されている。

とりわけ指導する側の教員の負担について世間の耳目を集めたのは、若手公立中教員らが「部活がブラックすぎて倒れそう」と訴えた一件で、顧問を引き受けるかどうかの選択権を与えてほしいというネット上の署名活動にはたちまち1万6000人もの賛同者を集めたという(「朝日新聞」2016, 2, 13)。

これらを材料に生徒、保護者、教員等様々な立場から部活動に光をあて、また新聞の全国アンケート等をもとに、そのメリット・デメリットを浮かびあがらせたプリントを作製し、生徒たちにレクチャーした。

6人で1つの班をつくり、付箋1枚につき1つのメリット・デメリットを書きこませ、それを台紙に貼っていく。

台紙は大きくメリット・デメリットのゾーンに分かれているから、出揃ったところでこちらのゾーンがより多くの付箋で埋められたかを確認させる(さらに、その台紙を時計回りに隣の班に回し、一巡させ、情報の共有化を図る)。

メリットゾーンの付箋が多ければ、「部活動には意義がある」をその班の統一見解とし、「私たちの班は、高校生活に部活動は必要だと考えます。なぜなら・・・」という形で全員の前で発表させる。

次は発表された意見の一部である。

「必要である。なぜなら人の輝く瞬間が見えるから・・・」

「不必要である。部活動を続けたところで、将来それで生計を立てられるわけではないから・・・」

「必要である。先輩・後輩の上下関係は実社会でも必ず直面する。それを今から学んでおくことには意味がある」

こうした基礎的トレーニングを経て、テーマの難度を少しずつ上げていけば、より深い学びも可能となる。

2 グループでプランを提出させる

堀裕嗣(2012)によれば、ディスカッションには二つの目的があり、一つはグループによる協働学習を通して「合意形成」を図るものであり、もう一つは他者の意見に触れることでそれぞれが「個人思考」を深化させる、ということであるらしい。

「現代社会」の単元に「食糧問題(自給率)」というのがあり、ここで「食品ロス」の問題を採りあげ、協働学習を通して課題の解決が出来ないか生徒たちに検討させた。即ち「食品ロスを減らすにはどうしたらよいか?そのため考えられるプランを検討せよ」。

一年間で日本国内で捨てられる食品(まだ食べられるのに)の量は、国連が途上国支援に回す食糧の2倍にあたるといわれる。

世界規模でみても、毎年生産される食糧の3分の1にあたる約13億トンが捨てられていて、国連もこれを問題視し、2030年までに食品ロスを半分に減らすという目標を掲げている(「朝日新聞」2016, 8, 28)。

勿論日本政府や自治体もこれを減らそうとはしている。

「本市(さいたま市)では・・・、全国295の自治体が食品ロスを削減するために発足した全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会に参画するなど、広域的な取り組みを推進しています」(「市議会だより さいたま」NO.70 2017, 8, 1)

食品ロスが出る背景の一つには食品業界内の長年の慣習が指摘されている。

「賞味期限」に達しておらず、まだ十分食べられるのに店頭から食品を撤去してしまう「3分の1ルール」や、生産が間に合わずに店頭の棚を欠品させたメーカーは小売り側に罰金を払うという「欠品ペナルティ」等がそれにあたる(「朝日新聞」2016, 9, 11)

また、家庭から出る食品ごみ年間870万トンのうち、食品ロスは302万トンと推計されるから、家庭でもロスを減らす工夫が成されないことには改善は覚束ない(「朝日新聞」2016, 8, 28)。

井出留美がその著書(2016)で、食品ロスを減らす10か条というものを提案している。

買い物の前に冷蔵庫をチェックするとか、店頭では棚の手前から買う、食材はそのつど

使い切る等であるが、こうした基本的情報や提案をプリントにまとめ、生徒にレクチャーしたうえで、班を編成し、ロスを減らすためのプランを検討させる。

手法は「部活動」とほぼ同様である。

次のようなプランが考え出された。

「家庭から出る食品ごみの中には未開封のものもあるから、家庭に協力を呼びかけて「未開封の日」を作り、フードバンクに寄付をする」

「大規模スーパーに協力してもらい、余った食材をフードバンクに寄付してもらおうが、寄付されるバンク側もフードバンクタウンを作って連携する」

「店頭では賞味期限の迫った食品から順に手に取れるよう、棚にボタン式の装置を作る」

「スーパーや家庭から出る生ごみを自治体が回収し、肥料にして農家に提供すれば、穀物自給率も上昇する」

3 「家庭学習」から「授業外学習」へ

関田一彦(2016)は、授業外学習に費やす時間の減少は大学生に限らず、高校段階でも顕著で、授業以外では特に勉強しないのが当たり前といった姿勢の生徒が大量に入学してくる、と言う。

高校の現場でもこれは以前から問題視されており、県教委や校長からはたびたび「生徒を家庭学習に向かわせるにはどうしたらよいか?」という検討課題が下ろされ、そのたび研修が行われる。

関田は、授業外に進んで机に向かう習慣のない学生を、主体的に授業外学習に向かうように誘う効果もアクティブ・ラーニングには期待されていると言うが、「食品ロス」を採りあげた時、教師の側から、無駄をなくすために君たちの母親は日々どのような工夫・努力をしているか、それを取材するようという「宿題」を出した。

また、グループで検討することになる次の授業までの休み時間や昼休みに、ロスを減らすためのプランを仲間と話し合っておくようにとも指示した。

「家庭学習」というと、勉強や部活動で疲れた中・高校生が、自宅で、教師から出された大量の宿題を前にため息をつくというシーンが想起される(最近、家計の足しにと、放課後にアルバイトに精を出す高校生も増えている)。

生徒が一日のうち最も長く、かつ活動的な時間を過ごすのはやはり学校という空間であろう。そこには授業時間以外の「すきま時間」というのが意外と多く存在するから、これを利用して「宿題」をやらせ、その成果を次の授業に持ち寄るよう促せばよい。

関田が言うように、子どもたちのエネルギーを授業に集中させ、そこでのパフォーマンス(課題遂行や応答)が最高度に発揮されるよう授業外学習を位置づけてやるのである。

高校現場では、生徒を家庭学習に向かわせるには大量の宿題を出すしかないといった旧態依然たる発想が幅をきかせているが、それをやらされる生徒の疲労とそれをチェックする教師の過労を考慮しない無責任な提案といわざるをえない(教育効果の点でも疑問がある)。

ここは思考を転換させ、夜から昼へ、家庭から学校へ、一人きりの時間から仲間とともにある「授業外」の時間帯へ、子どもたちの活動の場をシフトさせてやるべきであろう(これこそ「反転」学習である)。

4 教材研究

「書く・話す・発表する」等の部分を活発なものとするため、討論法や協働学習法など様々な手法が開発され、今やそれらは200はあるといわれる。

アクティブ・ラーニング型授業という、ともすればこうした派手な方法論に目を奪われがちとなるが、実はそれに先行するレクチャー部分(課題やテーマについて基本情報を提示する知の伝達部分)が一にも二にも重要なものとなってくる。

「〇〇について賛成か反対か?」と問われても、その〇〇について十分な情報が与えられていないと生徒たちは思考のしようがない。

ここで、授業づくりに向けた教師の周到な準備が必要になってくる。

何冊かの文献にあたるのは当然として、ストックしてある膨大な量の新聞記事にも目を通し、NHKを中心とした映像関係もチェックする。そしてそれらから得た情報をプリントにまとめる(豊富なビジュアルとともに)。

関連する写真や絵図を拡大コピーして視覚教材に加工する。また重要ポイントや代表的賛否両論等は模造紙に大書する。

これまでの伝統的な板書スタイルは極力排除し、プリントや模造紙を多用することで「書く・話す・発表する」ための時間を確保しつつ、かつ教室内の風景も変える。

情報の「可視化」である。

その結果、授業前半のレクチャー部分は密度濃いものとなり、後半の討論等の部分も充実したものになりうる(アクティブ・ラーニング型授業を追求するということは、実は一人の教師の授業力全体のアップをもたらす)。

こうした一連の流れにおいて、肝要なのは、そのテーマに関わる教師自身の問題意識の深浅である。そのテーマが教師の心の琴線に深く触れるものであるほど、教材研究と教具の準備に一層の熱が入る。

そしてそれが、教師の「発信力」につながる。

授業というのは、生徒という他者に対し、教師がなにごとかを発信していく営みであるが、問題はその時の「発信力」であろう。

ダムにも例えられる。常に満水状態のダムなら、いざ水門を開けた時、水は勢いよく放たれ、下流の田園はうるおう。逆に渇水状態なら干上がる(この時の水の勢いこそが「発信力」である)。

では満々とたたえられるべき水の実体とは何かというと、それは教師個人の知識・問題意識・感性・思想といったものであり、それらの総合である。

総合力あふれる教師は「発信力」も強い。

満水状態は維持されたほうがよい。そのためには日々、万卷の書に親しみ、映画・演劇

に触れ、つとめて出歩き、人との出会いを強く求める、といった研さんは欠かせない。

「授業づくりの営みは、・・教師が持つありとあらゆるものを総動員した表現の一つの形式」(池田輝政・松本浩司 2016)に他ならない。

5 評価

学校の教育活動というのは、生徒の諸活動に対して教師がフィードバックとしての「評価」を与えることの繰り返しである。「評価」抜きの教育活動はあり得ない。

これまでの講義式授業では、教師と生徒一人ひとりとは放射線状につながっているから評価は比較的容易であった。定期考査の素点を基本に、数値化された評価・評定を下せばよかったのだが、討論や協働学習等ヨコの活動を促すアクティブ・ラーニング型授業ではこれは容易ではなくなる。

話し合いや意見表明の出来栄を簡単には点数化できないからである。

解決のカギは「平常点」と呼ばれる「形成的評価」の中にある。

「形成的評価」とは、考査素点以外の分野(提出物、作品、意欲、態度・・等)に幅広く評価の対象を求め、一人の生徒を全人的に評価し、以後の学習への取り組みを励まそうというものである(一部の教師が信ずる「減点主義」とは本来の趣旨が異なる)。

一つの課題(テーマ)を設定し、それについて討論や協働学習をやらせるにしても、必ずどこかで個人の思考を問う局面が必要になってくる。話し合いに先行して「個人でのじっくりとした思考のステップ」(杉江修治 2006)を踏ませるからである。

シートを配布し、個人の意見や考えを書かせるとして、それをそのまま終わらせず、評価の対象とすべく活用する。

秀逸なものはプリントに印刷して顕彰するが、その顕彰された生徒たちについては後の定期考査の素点に加点してやる。

グループによる意見表明にしても、出来のよいグループについてはその構成員全員、やはり考査素点にプラスする。提出物、成果物についても同様である。

定期考査というのは年間5回あり、生徒はこれに全力集中し、学校全体としてもこの期間中は部活動を中止するなどして環境整備を心がける。

そこで得た素点と、それに基づく評点は「内申書」や「指導要録」中の最も重要な数値となって残される。

この素点に、アクティブ・ラーニング部分の「評価」を柔軟にリンクさせるのである。

西川純(2017)が言うように、結局は子ども自身も、教師も、親も、納得できるのは、テストによる数値だから、これに「書く・話す・発表する」部分の評価をつなげることで、生徒のモチベーションは一層高まっていく。

まとめ

勤務校では学校行事の一環で進路見学会というのを毎年実施している。

就職希望の生徒たちを引率して県内の企業を訪問するたび、質疑応答の場面では近年同

じょうな問答が繰り返される。

「この会社は、どのような高校生を積極的に採用したいのか？」

曰く、「コミュニケーション力のある人を採用する」

逆にいえば、コミュニケーション力やプレゼンテーション(発表)力のない人は採用しないということであり、それほど昨今の企業は厳しい視線を学校教育に注いでいる。

アクティブ・ラーニング型授業とは、生徒たちが学校を出た後の長い時間軸をも包摂し、そこで必要とされる「見えない学力(=他者とつながれる力)」(大前暁政 2017)をも養成しようとするかつてない学習のあり方といえる。

次はこうした授業を体験した生徒たちの感想である。

「班長をしていたから大変だったけど、人前で発表することの大切さや緊張というものを、今から経験することが出来たのはよかった」(女子)

「社会科の勉強は、掘り下げるだけでこんなに面白くなるんだということを知ることが出来た」(女子)

「中学校では社会科は得意ではなかったけれど、高校生になって一気に得意教科の一つになった」(男子)

成果は大きい、と確信している。

(参考)

- ・溝上慎一編『高等学校におけるアクティブラーニング 理論編』東信堂 2016
- ・宮崎猛編著『アクティブ・ラーニングの基本と授業のアイデア』ナツメ社 2017
- ・堀裕嗣『教室ファシリテーション 10 のアイテム 100 のステップ』学事出版 2012
- ・井出留美『賞味期限のウソ』幻冬舎新書 2016
- ・安永悟、関田一彦、水野正朗編『アクティブラーニングの技法・授業デザイン』東信堂 2016
- ・池田輝政、松本浩司編『アクティブラーニングを創る』ナカニシヤ出版 2016
- ・大前暁政『実践アクティブ・ラーニングまるわかり講座』小学館 2017
- ・西川純『アクティブ・ラーニングの評価がわかる!』学陽書房 2017